

紅い花
(1) 清風
琉 紅

(二) 清風

十五世紀の沖縄。

三つの国が勢力を争う時代、『琉球』と呼ばれていた。

本島から西に離れて小さな島、久高島があつた。

光できらめく波の下、それにつられて揺れ動く砂の上に、十六、七才の少女の素足が入り込んだ。魚と戯れたいのであろうか、砂を激しくかき乱している。

青や桃色の小さな魚たちも少女の足をつつく。

少女は、辯模様の着物を羽織り、裾をめくりながら遊びに興じていたが、海から急に吹いた風で髪を乱し、その場で立ち止まつた。

「風、私に……理想郷から？」

乱れた髪を整えながら、周りをぐるりと見渡した。

いつもと変わらない風景であつた。

波打ち際まで来ると、小さな木片がゆらゆらと流れ着いているのを見つけた。

(今日は運がいいわ)

手にして直ぐに目を輝かせた。

それはただの木くずではなく、丸みを帯びて花の彫刻が入

つてゐる。

これまでに見たことのない小さな花びらが四枚交互に重なり、やや前向きに首を垂れる格好になつてゐる。花の部分には薄い紅の色が残つてゐた。

(綺麗だわ。きっと、どこかで咲いているのよ)

それを胸に当て、高まる胸の鼓動を伝えると、水平線の彼方を見続けた。

浜から歩いてすぐ、少女の家がある。

屋根は藁で綺麗に整えられて上部で結ばれ、家の壁は強固な木材で骨組みを作り、土で塗り固められている。家の中は竹を敷き詰め、その上にやわらかめの葉をのせてゐる。

又、その竹を半分に切つて、木々に結び付け、雨水がそれを通つて、下に置いてある壺に溜まる仕組みにしてある。

サンゴの大きなかけらを砂浜で集めて、家の周りをぐるつと囲むように積んでゐる。白く、海岸のように美しい。

その家の奥には、少女の胸をときめかせた漂流物が、所狭しと飾られている。

色鮮やかな紫や赤色が混じり合い、鳥の模様が施された女性用婚姻の服らしき布。

象に台車を引かせた戦士の絵。

髪の毛を剃り、一人葉の上で座っている男性の置物。

十字の木に繋がれた人。

海水で滲み、縫い目が解かれつつある布。

それには見たことのない山や海、星空が描かれていた。

つづく